

身近な疾患の対応理解

統合失調症 能代保健所 家族を対象に学習会

「統合失調症の理解と家族の対応」をテーマにした精神保健福祉家族学習会は2日、能代市の県

山本地域振興局で開かれ、精神障害者の家族や行政関係者ら約50人が山本組合総合病院精神科医



統合失調症について講話する精神科医の利川氏

師の利川壽晴氏の講話を聴いた。利川氏は「統合失調症は身近な疾患」であり、「必要なのは患者の生活支援」と強調した。

能代保健所主催。精神障害者は能代山本で約1370人を数える。それ、その4割が統合失調症という。一方で、病気としての理解の乏しさから社会的な偏見も根強く、福祉政策が遅れている現状もある。このため、精神障害者を抱える家族を対象に病気や治療、利用できる福祉サービスに理解を深めてもらうと3回シリーズで家族学習会を開催することにした。

初回は、精神科医の利川氏が「病気の理解について」と題して講話。統合失調症は、約100人に1人の割合で発症し、その多くは14歳～35歳で好発する「若者の病気」であることが説明。病前の性

格としては「おとなしい手のかからない子」という傾向があり、「おとなしさは対人緊張の強さ、手のかからないのは自我の弱さ」と解釈できるとした。

また、発症は多くの場合、人間関係のあつれきや辛い体験など人生の節目がきっかけとなり、「脳の病気であることは間違いないのだが、どこが悪いのかよく分からない」と医学的な説明は途上にある。治療は、薬物治療で行われており、薬には患者との相性がある」と説明した。

症状が進展した時は入院治療も行われるが、慢性期になると薬物治療を継続しながら焦らず、ゆっくり休むこと、そして、生活のリズムをつけるためのデイケアへの参加や低下した社会生活能力をサポートする周囲の理解が大切で、「患者に必要なのは生活支援」と強調した。

講話の後には、利川氏も交えながら病気のことで、家族の対応などに関して参加者同士のグループワークも行われた。

家族学習会は、9月13日に「家族のできることについて」、10月18日に「統合失調症の方の社会的資源・福祉サービスについて」をテーマに開催する。